

2024年5月10日
府中市郷土の森博物館
天文企画・交流係

「春の夫婦星」という呼び名は、いつごろから登場したのか？

【目的】

プラネタリウムの解説で、うしかい座のアルクトゥルスとおとめ座のスピカの2星について「春の夫婦星」と紹介されることがあり、当館スタッフもそのように紹介することがあるが、いつごろから文献などで登場したのか調査する。

【仮説①】 アルクトゥルスの固有運動が「春の夫婦星」の呼び名に影響した？

アルクトゥルスは固有運動が大きい星で、6万年後には星空でスピカのそばで輝くと考えられている。6万年後には2星が並んで見えることから「春の夫婦星」という呼び名に影響したのではないかと？

【仮説②】 デジタルプラネタリウムの発展により星の固有運動を再現できるようになったから「春の夫婦星」の呼び名ができた？

デジタルプラネタリウムが日本で初めて登場したのは、1992年（東急まちだスタードームで1週間のデモ）のこと。文献で1992年以前に「春の夫婦星」が書かれていた場合、この仮説は否定される。

【調査方法】

星の和名や天文に関する文献を調べ、「春の夫婦星」もしくは、それに関連するアルクトゥルスとスピカの和名が書かれている文献名と発行年をピックアップする。
固有運動の発見年を調べる。

【結果と考察】

別紙「調査文献」にて、「春の夫婦星」について記載があったもので一番古いものは、1974年だった。よって、仮説②は否定された。

仮説①について、恒星の固有運動は、1718年にエドモンド・ハレーによって発見されたといわれており、その当時、日本は江戸時代でプラネタリウムもない時代なので、固有運動から「春の夫婦星」の呼び名がついたのは考えにくいと思われる。

「春の夫婦星」と記載があった文献によると、「アルクトゥルスとスピカの色の対比」「夏の七夕の織姫星、彦星に対抗して作られたのでしょう」と書かれているものもあり、2星の色の対比や七夕の星に対して呼ばれるようになったと考えられる。

また、和名として古くからどこかの地域で呼ばれていたという記載は見つからなかった。今回の「春の夫婦星」についての調査では、1974年に出版された本が一番古いものだった。最低でも50年前から世に出ていた呼び名ということが分かり、全国プラネタリウムなどで紹介されることで、少しずつ定着していったと思われる。今後も「春の夫婦星」について記載のある、より古い文献がないか調査を続けていきたい。